

## 目次

1. 事務局より
2. 前年度編集責任者より
3. 新編集委員より
4. 本年度編集責任者より
5. 運営・企画担当より
6. 2013年度例会予定
7. 談話会予定
8. 関西談話会の廃止について
9. 各地の研究会だより
10. 木下先生の思い出を語る会
11. メーリングリスト frenchling からのお知らせ
12. 収支決算報告
13. 編集後記

## 1. 事務局より

事務局が青山学院大学に移って1年になりました。引き継ぎの際、旧事務局からすべての必要な資料と貴重なアドバイスをいただいたのですが、はじめのことで、こちらの理解が至らないところもあり、また技術上のさまざまなトラブルが発生して、旧事務局メンバーの方々には何度もお助けをお願いすることになりました。大阪大学の春木さん、三藤さん、そしてとりわけ大阪から二度にわたってわざわざいらして下さった井元さんに深く感謝いたします。

今年度は、Dhorne は在外研究でパリにいることになりましたので、事務局の業務は鳥居がほとんど一人で担当することになります。幸い現代テクノロジーのおかげで世界中どこにいても同じ仕事ができるようになりましたので、メールでできる仕事は従来通り Dhorne が担当することにいたします。業務に滞りがないようにするつもりですが、どうぞみなさまのご理解をお願いする次第です。

この機会に、一言述べさせていただきますと、SJLF は多くある学会のなかでもその会費がもっとも低くおさえられている学会です。それゆえ他の多くの学会とは異なって、事務局はボランティアによって支えられています。そのこともあわせてご理解いただけると幸いです。

事務の運営に関しては、原則的に去年と同じ仕方で行いたいと思います。

念のために要点を述べますと、以下の通りです。

- 1) 会費の徴収は基本的に郵便振替で行います。『フ

ランス語学研究』に同封します振り込み用紙で会費を速やかにお払いくださるようお願いいたします。3年以上にわたって会費納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください。

2) 入会の申し込みまたは事務局への問い合わせは、次のメールアドレスにお願いします：

belf-bureau@cl.aoyama.ac.jp

活気があるすぐれた論文があふれる BELF になるように願っています。みなさま、どうぞよろしくお願いたします。

(France Dhorne)

## 2. 前年度編集責任者より

昨年の編集責任者就任のあいさつで予想した通り、責任者としてはあまり満足なことができず、皆様のご支援のおかげで何とか一年を終えられたという感じです。実はこの原稿を作成している時点ではまだ終わったわけではなく、『フランス語学研究』第47号の二校の最中という段階ですが、この文が皆さんのお目に触れるころには、すべての作業が終わり、ほっと一息ついているところでしょう。

校正については、初校は編集委員各氏が分担して行い、二校で前編集責任者の曾我氏、次期編集責任者の六鹿氏、さらに守田貴弘氏に協力をお願いし、手分けして行いました。広告集めからその校正までを担当して下さった塩田明子氏を含め、編集後記で書けませんでしたので、ここでお礼を申し上げます。

また編集委員会の議事録作成にあたっては、一年間、渡邊淳也氏に大変お世話になりました。お礼を申し上げます。

この一年、例会全部に出席することはできませんでしたが、例年よりは多く出席したつもりです。全体を通じて、大学院生の発表が多かったことは、これからのフランス語学会にまだまだ期待が持てることの証しではないかと思っています。ことしも若い方々に大いに発表をしていただきたいと願っています。

次は六鹿さんです。すでに編集責任経験者なので、安心してお任せできる方です。よろしくお願いたします。

(石野好一)

### 3. 新編集委員より

#### ◆ 鳥居 正文 (青山学院大学)

思いがけず再登板ということになりました。よろしく願いいたします。今回は、バブル崩壊が誰の目にも明らかになった1993年からの8年間、編集委員を務めさせていただきました。その間、それまで十数年に亘って上智大学で引き受けて戴いていた例会の会場をローテーションで回していこうということになり、最初の3年間を青山学院でお引き受けしました。例会や講演会の会場の確保に、また会が終わった後の発表者・講演者を交えての飲み会の会場探しに走り回ったことを、ついこの間のことのように思い出します。今回は、2012年度から3年間の予定で事務局を引き受けさせていただいてますが、歴代の事務局担当者のご努力により事務局の仕事が効率化され、編集委員の間で作業を分担する仕組みもでき上がっていますので、ドルヌさんと二人で何とか務めを果たしているところです。

院生の頃、たまたまお呼びが掛かって始めた辞書の仕事が、その後も長く尾を引いて、結局何冊もの辞書とかかわることになってしまいました。考えてみれば対象が言葉になっただけで、昆虫や貝殻や海藻を集めては標本にして悦に入っていた子どもの頃と基本的には変わっていないのかもしれませんが。三つ子の魂百までとはよく言ったものです。それにしても、「地味」の代名詞と言ってもよい「辞書編集の仕事」をテーマにした本がベストセラーになり、宮崎あおい出演の映画にもなるとは、世の中、何が起るかわかりませんね。

足が遠のいていた例会にもできるだけ顔を出して、若い研究者の新しい研究動向にも触れたいと思っています。

#### ◆ 阿部 宏 (東北大学)

院生だった頃、例会は上智大学で開催されていましたが、偉い先生方が真剣な議論を展開されている雰囲気、あまりに畏れ多くて気軽に参加するという気分になれませんでした。当時授業でご指導いただいていた故木下光一先生に、ある時、できれば次回に出させていただきたい旨を申し上げたのですが、上記の理由でやはり行きませんでした。後日に、こういう院生が来るから入会手続きをお願いする、とわざわざ事務局に知らせてくださっていたことがわかり、非常に恐縮し、この後すぐくらいに入会した次第です。

内側から見る学会の雰囲気は、外からの想像とは全く異なったものでした。院生は大歓迎で、参考文献はじめ有益な情報のほとんどは学会から教わりま

した。はじめて原稿が掲載された学会誌は、嬉しさのあまり、毎日鞆に入れて持ち歩いていました。論文の書き方も、学会で鍛えられたと思います。

その後、編集委員に加えて運営委員も担当しましたが、まだ30代の身としては、純粋な研究面、人間心理への配慮、事務処理などの諸側面が複合した、毎月の例会の設定やシンポジウムのオーガナイズはなかなか厳しいものでした。しかし、後に本務校で講座運営の中心、さらには大学本部のきつい仕事まで担当させられましたが、ストレス性の犯罪に走ることもなく、何とかこなせたのは、この時の経験があつてのことだ、と後でわかりました。

フランス語学会は、かように恩義のあるところで、編集委員の拝命は二度目ですが、これをお断りするのには、人間をやめることに等しい気がします。非力ながら、若干の貢献ができればと思っています。どうか、よろしく願い致します。

#### ◆ 伊藤 達也 (名古屋外国語大学)

私は愛知県で生まれ、父親の転勤で中学から神奈川県に移りました。慶応義塾大学の文学部に入学し、日吉で習いはじめたのがフランス語に接した最初です。1年時の後半からはアテネ・フランセで会話も習い始めました。学部時代に現代思想や批評理論などをかじり、20世紀のパイロット学問としての言語学に興味を持ちました。しかし当時の仏文では言語学を学ぶのが困難であり、外部の先生方の音韻論や統語論の講義を取りながら図書館でフランスの言語学を独習していました。4年時には松原秀一先生のゼミで、言語哲学や論理学寄りの卒論を書きました。その後、慶応の文学研究科に進み、川口順二先生に指導を仰ぎました。大学院の1年時に早稲田の遠山先生が当時出たばかりのA. Culioliの本を読んでいて、生成文法などに生意気にも不満であった私は大変興味を引かれました。同年塾派遣交換留学生としてパリ第三大に留学し、初めてフランスの地を踏みしました。その後修士を経て、フランス給費留学生の試験にもなんとか通り、2003年にJ-J. Franckel先生の指導で、意味論の分野で相互作用が多義を生み出すメカニズムを説明する博士論文を書きました。パリ時代は現在につながる様々な出会いや気づきがありました。帰国後、2005年からフランス語と言語学の教師になりました。現在人文科学、とりわけフランス語は危機にあると思いますが、新たな飛躍への好機と捉え、全体の発展へ慎まい貢献が出来ればと思っています。

#### 4. 本年度編集責任者より

『フランス語学研究』48号の編集責任者をする事になりました。よろしくお願ひいたします。

数年前に編集責任者をなされた西村牧夫さんから、以前に私は一度この役割を担っていると聞かされて、ああそうだったかもしれないとバックナンバーを調べてみたところ、それは23号のことだと分かりました。私自身はすっかり忘れてしまっていたわけですが、おそらくそれは、当時はまだ現在のように分業も進んでおらず、電子化もほぼゼロで、東京や近辺在住の委員がみんなで寄り集まって編集作業を行わざるをえず、責任者という概念が確立していなかったからだと思います。

現在は、原稿のやり取り、校正、割付、印刷等、すべてとても簡単になりましたが、それと並行するように責任者の役割が重くなったような気がしています。昔の記憶がほとんどなく、また、その記憶自体が役に立ちそうもなく、ただ編集責任者用のマニュアルのみがたよりという、きわめて現代的な状況に置かれた私ですが、会員、投稿者、そしてとりわけ編集委員のみなさんのお力添えを得て、なんとかこの仕事をうまく運べればと思っています。

ところで、編集責任者の無上の楽しみであるナンバリング、原稿をまとめて印刷所にまわす前に、一回押すたびに番号が増えて印字される器具（木下先生が編集作業をなさっていた頃から伝わる器具）を使って全原稿に通して番号をつける作業であるナンバリングは今も工程に入っているのでしょうか。

(六鹿 豊)

#### 5. 運営・企画担当より

2013年3月11日の14時30分頃、ある先生からおよそ2年と1週間ぶりにメールが届きました。世間が黙祷の準備をしている頃、私はそれとはまったく別の理由で背筋がピンと伸びてしまいました。そのとき自宅の机に向かっていたことは覚えていますが、勉強していたのか、ゲームをして遊んでいたのかは覚えていません。そのメールと、添付されていたファイルを読み、急いで返信の内容を考えはじめました。いや、内容だけではなく、返信の文章のどこで韻を踏むか、どこで本歌取りを使うかも考えなければ。なにしろ、通り一遍の平板な文章を返してすむ相手ではありません。なんとか15時過ぎに返信し、以後、何通かやり取りをしました。

添付されていたのは、私が去年出した本に対するほぼ絶賛と言ってよい書評（『図書新聞』掲載予定）でした。他方、メール本文では、研究者として私のふるまい方が「若い」と一喝されました。若い研究

者に向かって「若い」と言っても一喝したことにはならないでしょう。私に対する「若い」が一喝になるのは、私がもう若くないからにはほかなりません。

私も含めて、多くの若手・中堅研究者が実際以上に自分を若く見積もってしまう理由は大きく分けて二つあるように思います。一つめは、専任職がない、あるいは任期がついているといった境遇。年齢と研究業績がそれなりにあっても、こうした境遇におかれると「自分は駆け出しの若輩者にすぎない」という自己評価を下しがちです。二つめは、一つめと表裏をなす問題ですが、任期のついていない定職を得るために、学会誌への掲載を目指して学会（「学界」とは微妙に異なります）からの評価を得ようとする。ずっと点数をつけられる立場にいることは、ずっと子どもでいることを意味します。とりわけその点数が低いものであった場合には、「先生方にもっと評価されるようにならなければ」という子どもの発想に陥りがちです。私個人のことを言えば、ニューズレター第17号（2009年）に書いたように、プロとして発表している以上、どんなに低い点数をつけられて叩かれても堂々としていなければならないと自分に言い聞かせていました。

3月11日のメールは、その「子どもじみた堂々」をそろそろ卒業してよいという卒業証書のように思われました。

もちろん、子どもと大人は対等ではありません。子どもが大人を乗り越え、子どもでなくなるのは、大人から学ぶべきものを学んだ後でしかありません。しかし、学ぶべきことを学んだ人間がいつまでも子どもじみたふるまいをしていては困ります。次の世代が続いているのですから。私は学位を取ってから10年もの時間を子どもとして過ごしてしまいましたが、2013.3.11をもってようやく卒業証書を手にすることができました。

学会によっては、若手の登竜門と化し、評価（批判）する側と評価（批判）される側に完全に二分しているところがあります。これでは、評価（批判）する側は自らを省みる機会がなく、評価（批判）される側はいつまでも若いままです。このシステムの中では、お互いがいつまでもぬるま湯に浸っていられるのです。

私が運営を務めるあいだは、日本フランス語学会の例会やシンポジウムをそのような場にするつもりはありません。6月1日のシンポジウム「認知言語学の功罪」は、「哲学のおもしろさは、自分の主張が間違いである可能性、人から批判される可能性がものすごく高い地点で、それでも批判されないことを言うてやろうとするスリルにあります」

(ACADEMIC ANIMAL 知的探求者たち「“考える”ほどスリリングな遊びはない」(前篇) 哲学者 野矢茂樹, 2010年11月16日, <http://wedge.ismedia.jp/articles/-/1129>) ということを実演しようとしたものです. これからも, 子どもから大人まで, それぞれがスリルを味わうことのできる運営を目指したいと思います.

(酒井 智宏)

## 6. 2013年度例会予定

日本フランス語学会では, 毎年4月から12月まで(7月と8月を除く)月一回, 原則として土曜日15:00-18:00に例会を開いています. 一回の例会では通常二人の方が研究発表を行います.

例会案内はホームページによる他, メールिंगリスト frenchling でも流しています.

例会はフランス語学会の会員以外の方でも, 自由に来聴することができます. 入場も無料です. みなさまのご参加をお待ちしております.

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館  
アクセス:

東京メトロ丸ノ内線 茗荷谷駅下車 徒歩2分  
東京メトロ有楽町線 護国寺駅下車 徒歩8分

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ:

酒井 智宏 (例会運営担当・跡見学園女子大学)  
[madara@tky.3web.ne.jp](mailto:madara@tky.3web.ne.jp)

以下はニューズレター編集段階の4月29日現在の予定です. 最新の予定は学会ホームページで確認してください.

第286回例会 2013年6月22日(土) 15:00-18:00  
会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室

(1) 谷川 恵 (東京大学大学院)

「フランス語における付加形容詞の分布について」  
(仮題)

(2) 佐々木 幸太 (関西学院大学大学院)

「行為主体のありかたの変化と *se mettre à Inf.*」(仮題)

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第287回例会 2013年9月28日(土) 15:00-18:00  
会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室

(1) 発表者未定

(2) 発表者未定

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第288回例会 2013年10月未定(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室

(1) 川上 夏林 (京都大学大学院)「発表題目未定」

(2) 佐々木 (山本) 香理 (関西学院大学非常勤)「発表題目未定」

司会: 酒井 智宏 (跡見学園女子大学)

第289回例会 2013年11月9日(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室

(1) 津田 洋子 (京都大学大学院)「発表題目未定」

(2) 発表者未定

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第290回例会 2013年12月7日(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室

(1) 東郷 雄二 (京都大学)「発表題目未定」

(2) 発表者未定

司会: 酒井 智宏 (跡見学園女子大学)

## 7. 2013年度談話会予定

今年の談話会は「訳すということの多面性」というテーマで開催します. なお以下の情報は4月現在のものです. 最新の情報は学会のホームページでご確認ください.

開催日時: 7月20日(土) 15時~18時

会場: 明治学院大学 白金校舎 本館3階 1359教室

発表者:

・三浦信孝 (中央大学) 発表タイトル: 未定

・斎藤かぐみ (前ル・モンド・ディプロマティーク 日本語版代表, 東京大学非常勤)

発表タイトル (仮): 「共訳の現場を振り返って」

・加藤久佳 (慶應義塾大学研究員)

発表タイトル (仮): 「文学とその翻訳における「視点」の考察~*Le Petit Prince* を題材に」

多数の方々のご参加をお待ちしております.

(須藤佳子・田原いずみ)

## 8. 関西でのフランス語学談話会および関西での11月例会の終了について

一昨年、すなわち2011年の11月の会を最後に、関西でのフランス語学談話会および関西での11月の例会は終了しました。本来ならば昨年度のニューズレターでその経緯を皆さんにご説明すべきでした。1年遅れてしまいましたが、やはり二つの会の終了に関して皆さんに説明すべきであるということで、第1回目から関わってきた者としてあらためて簡単に経緯を記したいと思います。

第1回の談話会は1984年の秋の仏文学会の折りに大阪で開かれました。当時は談話会はフランス語学会の行事ではなく、関西関東の有志によって組織開催されたものです。第1回目が大阪で開催されたことにも意味があります。当時はまだ学会ではなく、日本フランス語学研究会という名前だった当会ですが、例会は東京だけで行われており、実態は一部の有志の方々によって運営されていたとは言え、編集委員会には大御所の先生達が名前を連ねていました。そして、東京の例会に行く機会のない関西その他の地方の者には一体会がどのように運営されていて、例会で発表するにも、論文を投稿するにも実際にははどうしたらいいのか、あるいはどんな基準で採用されるのかもよく分からない状況でした。一方、80年前後からフランス留学を終えた研究者の帰国も多くなり、若手研究者を中心にもっと全国的に交流を深めて東西の風通しをよくし、互いの研究に触れあう機会を増やそうというような機運が生まれてきました。そんな中で、東西の有志数人が中心になってフランス語学研究会の例会の枠の外で自由な交流をするために談話会が企画され、東西の交流からということで、先ず大阪で談話会が開かれたのです。

こうして第1回目のフランス語学談話会が、大阪は中之島の中央公会堂の1室を借りて開かれ、関西関東から二人の研究発表があり、出席者は30人以上で熱気にあふれた会になりました。

第2回の談話会は東京で開かれ、それ以後、談話会は毎年春（現在は夏）には東京で、秋には関西で開くという形が定着しました。会場も大阪、神戸、京都、名古屋と場所を変えていましたが、いつからか京都に固定され、イタリア会館、京大会館、京都大学などで開催されてきました。

初期の談話会は、まだ論文にしたり例会で発表するほどにはまとまっていない考察中の問題を発表して、みんなの批判や意見を聞こうというものでした。しかし、フランス語学研究会の編集委員会の体制が故木下先生の御努力で一新され、談話会の運営の中心になっていた者達も編集委員になり、その後研究

会が学会としての体制を整え、フランス語学会の運営も大きく改善されて、東西の交流も進み、地方の研究者や若手の研究者も例会で発表したり、投稿したりしやすくなりました。それにつれて談話会の役割も変わり、一つのテーマのもとに数人が発表するというシンポジウム形式が定着しました。さらにその後、フランス語以外の言語の研究者を発表者として招くということが大きな特色となりました。

また、秋の例会はフランス文学会が開かれる大学で開催されることも何度かありましたが、あるときから関西以外の遠方から秋の談話会に来られる人達のことも考えて、談話会が開かれる同じ週末に例会を関西で開くことになりました。これは同時に、関西周辺の研究者や院生の人達が東京に行かなくても例会で発表できるようにするという目的もありました。

こうして、11月（時に10月）のある週末に関西の談話会とフランス語学会の例会とが続けて開かれるという体制が20年ほど続きました。また最初は有志による会だった談話会も、フランス語学会の正式の行事として開かれるようになりました。

事情で開催されなかったことが一度だけあるものの、ほぼ30年近く続いた関西の談話会ですが、以前は東京をはじめとする遠方からも参加者が多くあり、秋の観光シーズンということで、京大の東郷雄二氏のお世話で宿泊の手配も行ったりしました。しかし、大学も様変わりし、また初期の談話会の主要な参加者も年齢を重ねて大学での仕事が増えたことなどもあり、次第に遠方、特に関東からの参加者が減りました。また、談話会そのものも考えられるテーマは殆どやり尽くしたと言っていいでしょう。関東その他の地方からの参加者が減ったことにより、同時に開かれる例会も参加者が関西の研究会のいつものメンバーと殆ど同じということになり、関西でわざわざ例会を行う意味もなくなってきました。（現在では東京の例会で発表する院生には交通費の補助も出るようになっていきます。）

談話会が京都に固定されてからは、談話会も例会も会場の手配に関してはずっと東郷雄二氏の手を煩わせてきました。

私事ではありますが、第1回の談話会から関わってきた私も東郷氏もあと数年で退職を迎えます。数年前から二人とも今の形での談話会はそろそろ役割を終えたのではないかと考えていましたが、一昨年の談話会の折りに諸般の事情を考えるとそろそろ潮時ではないかということになりました。関西の談話会に関わってきた他の方々にも諮って同意を得たうえで、関西の談話会並びに関西での例会の中止を編

集委員会に提案して了承され、こうして関西の談話会と例会の終了が決まりました。

関東からの参加者は次第に減ったのですが、談話会そのものはフランス語以外の言語研究者、特に関西周辺の言語関係の院生の人達の参加が多くなり、毎年盛況でした。その意味では、関西の談話会はフランス語の研究者のためだけでなく、関西での言語研究にも貢献してきたと言えるでしょう。そして、フランス語学会がフランス語研究だけに閉じた世界ではなく、常にオープンな精神を持っていることを象徴する行事でもありました。

関西での談話会の終了を残念に思う方々もおられるでしょうが、例会とは違う何らかの形の研究集会を持ちたいと思う人は、30年前に私たちがしたように、同志を集めてまた新たな会を組織すればいいわけです。研究の世界にも新陳代謝は必要です。

若い人達の新たな発想で新たな会が出来ることを期待しつつ、また過去27回開かれた関西の談話会で発表してくださった方々や、聴衆として参加してくださった方々に心から感謝しつつ、関西での談話会の幕引きをしたいと思います。

(春木仁孝)

## 9. 各地の研究会だより

### ◆関西フランス語研究会

関西大学を会場に、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。昨年は例年以上に低調で、結局、発表は一回だけでした。

7月21日

佐々木幸太「mettreの基本的な働きに関する一考察」

特に学生さんなどにとって人前で発表する機会を少しでも多く持つことは大変有意義なことです。研究を進める上で有用なアイデアやヒントを提供してくれる方々がたくさんいらっしゃいます。これを利用しない手はありません。学会発表されるという場合であっても、その前後にぜひ研究会でも発表して頂ければと思います。学会では時間が限られていますが、研究会では発表にも議論にも存分に時間をかけることができますので、同じ内容であっても研究会で発表する意味は大きいです。新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。

案内はメーリングリストFrenchlingのみで行っていますが、加入されていない方は世話人までアド

レスをお知らせいただければ、個別にメールでご案内いたします。

平塚徹：hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲：tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(平塚 徹)

### ◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。

日本フランス語学会と直接の関係はありませんが、多くのかたがたに参会していただきやすいよう、フランス語学会の例会がひらかれる日に、同じ（または近接した）会場で、原則として13時から14時30分まで開催します。フランス語学会例会の会場が変更されるときや、編集委員会などと重なるときは開催せず、年間5～6回程度の実施を目安とします。

会員資格、発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語（学）に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究にたいする論評といった形の発表も歓迎します。時間の内わけは、発表60分+質疑応答・コメント30分です。

昨年度から、今年度4月にかけては、下記のような内容で研究会が開催されました。

第1回 2012年4月21日（土）

発表者：近藤野里（東京外国語大学大学院）

題目：リエゾン子音の位置に関する一考察

第2回 2012年5月12日（土）

発表者：菊池大輔（中央大学大学院）

題目：フランスにおける共和国思想と多言語主義の考察

第3回 2012年6月23日（土）

発表者：津田香織（筑波大学大学院）

題目：結果状態を表すêtre+過去分詞について

第4回 2012年9月29日（土）

発表者：岸本聖子（大阪大学大学院）

題目：devoirの認識的用法と真理的用法をめぐっての一考察

第5回 2012年10月27日（土）

発表者： 渡邊修吾（獨協大学大学院）  
題目： 分裂文における名詞主語の位置について

第6回 2012年11月10日（土）  
発表者： 古賀健太郎（東京外国語大学大学院）  
題目： Pause-café 型複合語の形成について

第7回 2013年4月20日（土）  
発表者： 田代雅幸（筑波大学大学院）  
題目： Au contraire についての一考察

4月28日現在、今後の研究会の予定は、つぎのよう  
になっております。

第8回 2013年5月11日（土）13時から14時30分  
場所： 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室  
発表者： 喜田浩平（慶應義塾大学）  
題目： 語彙意味論と語用論（仮題）

第9回 2013年6月22日（土）13時から14時30分  
場所： 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室  
発表者： 未定

第10回 2013年9月28日（土）13時から14時30分  
場所： 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室  
発表者： 未定

第11回 2013年10月<日付未定> 13時から14時30分  
場所： 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室  
発表者： 未定

第12回 2013年11月9日（土）13時から14時30分  
場所： 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 7階 M2707 教室  
発表者： 未定

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年

度の研究会」の項目でご確認ください。ホームページ上で発表者が未定になっている回については、発表者を募集しております。

東京フランス語学研究会ホームページ：  
<http://ftky.jimdo.com/>

（渡邊淳也・塩田明子）

### 10. 木下先生の思い出を語る会

『フランス語学研究』第47号編集後記でもふれたように、2月23日、東京六本木の国際文化会館で、昨年亡くなった木下光一先生を偲ぶ会が開かれました。泉邦寿、古石篤子両氏が、おもにフランス語学会関係で故人とさまざまな形で交流のあった仲間たちに呼びかけ、木下先生の思い出を語り合おうという主旨で行ったもので、木下先生の御令嬢木下玲子さんを含む22名が集まりました。

会では、旧友、同僚、教え子といった方々が思い出を語り、皆で故人を偲びました。まず本学会の出発点である旧フランス語研究会時代からの友人である会津洋先生が口火を切り、当時の交友関係などを紹介しました。元同僚六鹿豊氏からは、白百合大時代の先生の歩く速さと飄々とした人柄などが伝えられました。阿部宏氏は、早稲田で受けた授業の様子を語り、その際配布された、細かい字で紙一杯に書き込まれた資料の一部を紹介しました。さらに独協大時代の同僚や教え子の方々からの思い出と続き、最後に木下玲子さんが、厳しくこわかった一方で、毎晩絵本を読んでもくれたお父さんとしての木下先生の一面を語り、会は和やかなうちに終わりました。

なお最後に、ご家族から本学会に5万円のご寄付をいただきました。ここに会員の皆様にご報告するとともに、ご家族のご厚意に心より感謝の意を表します。

（石野好一）

### 11. メーリングリスト frenchling からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用してください。利用にあたってはいくつかの注意を守っていただきたいのですが、当メーリングリストはフランス語学会と密接な関係にあります。フランス語学会を含め、特定の学会員だけを対

象とした連絡には使用しないでください。学会員以外にも開かれたオープンな会合や呼びかけにはどんどん利用してください。ただし、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどをご遠慮ください。(不適切と思われる投稿に対しては、適宜管理グループから注意喚起を行ってきましたが、出来るだけそのような事をしなくてもいいように皆さんの適切な利用をお願いします。)

なお、以前はフリーメールのアドレスでは登録をお断りしていましたが、現在はフリーメールのアドレスによる登録も受け付けています。また、アドレス変更、あるいは退会の時には旧アドレスの削除は各自でしていただくようお願いしていましたが、現在は管理グループで削除していますので、直接管理グループのアドレスまでご連絡ください。また、MLへの登録は自動では出来ない設定になっています。自動登録をしようと試みると、あとで管理グループが登録しようとしても不具合が発生して登録できないようになりますので、メンバー以外の方に勧められる場合は、必ず管理グループまで連絡するようにお伝えください。管理グループのアドレスは以下の通りです。

frenchling-owner@yahoogroups.jp  
(frenchling 管理グループ)

## 12. 2012 年度収支決算報告 (\*)

(単位 円)

<u>収入の部</u>	
会費	740,000
機関誌売上金	104,000
広告収入	90,000
預金利息	6,590
その他雑収入	50,000
小計	990,590
前年度繰越金	3,709,279
計	4,699,869
<u>支出の部</u>	
BELF46 号印刷代金	424,494
BELF47 号編集実費	20,000
ニューズレタ印刷代金	18,816
発送費・通信費	45,523
特別発表(講演)謝礼	240,000
人件費	195,144
会場費	0
事務消耗品費	29,953

振込手数料	21,805
ホームページ管理費	7,430
雑費	10,000

小計	1,013,165
次年度繰越金	3,686,704
計	4,699,869

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	405,410
郵便貯金 (普通)	288,646
(振替)	986,588
銀行預金 (三井住友銀行定期預金)	2,006,412
現金	△352
計	3,686,704

(\*) 2013 年 3 月 31 日現在の収支決算報告. 6 月に開催される編集委員会で会計報告と監査報告がなされ、審議のうえ承認の手続きがとられる。

〒 150-8366

東京都渋谷区渋谷 4-4-25  
青山学院大学フランス文学科合同研究室内  
日本フランス語学会

## 13. 編集後記

フランス語学の研究をとりまく環境は、あいかわらずきびしいものがありますが、その一方で近年、長年の大学院生の減少傾向に歯止めがかかったようにも見うけられます。どちらを向いてもきびしい時代だからこそ、思いきって興味のある研究に時間をついやそうと決心した若いみなさんの姿はまことに爽涼で、わたしも初心に立ちかえろうという気になります。そして、わたし自身がこれまで同学先進の方がたからうけてきた学恩を、できるかぎり若い世代に返してゆきたいと思っております。

今回も多くの方がたのご協力のおかげをもちまして、ニューズレターを刊行することができました。執筆者のみなさまに、そして版下作成や印刷所との連絡の労をとってくださった平塚徹さんに、感謝を申し添えたく存じます。

(渡邊 淳也)

♪ ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>